

がん患者の皮膚障害アトラス

宇原 久・編著

【評者】 山崎直也

(国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科長)



B5判・432頁
2024年2月
定価：14,300円
(本体13,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-05084-5
医学書院 刊

本書を一目見て虜になりました。大変な驚きでした。需要がありながら今までに無かった本当に欲しかった一冊です。

がん患者にはがんそのものの進行によって起こる皮膚症状と、各種治療によって起こる皮膚障害があります。かつて、いわゆる抗がん薬治療で患者さんが良く知っていて恐れている副作用といえば、脱毛と悪心嘔吐がその代表でした。ところが21世紀になって、分子標的薬が次々に登場し、2010年代には免疫チェックポイント阻害薬の進歩によって免疫療法がはっきりとがん治療の太い柱になるに従い、がん薬物療法の副作用は様変わりし、皮膚障害は、その代表的なものの一つとして注目されるようになりました。しかし、各種臓器がんの治療医は皮膚障害の診断治療にまで手が回りませんし、逆に皮膚科医が日進月歩の多くの新規抗がん薬の皮膚障害マネジメントを的確に行うことは大変困難であるといわざるを得ませんでした。本書はその問題を一気に解決してくれる一冊です。

皮膚障害、皮膚疾患はその大部分が生命にはかわらないものであることからどうしても軽くみられがちです。近年では“アピアランスケア”ということに耳にする機会が増えました。がん治療が

外来へとシフトし、がん患者が社会とのかかわりを保ちながら治療を始め、長く継続することがとても増えてきました。直接生命を脅かさなくても外見の変化ががん患者の社会的な健康を脅かすことを考えなければなりません。もちろん見逃せば生命を脅かすいくつかの重症皮疹を早期に診断することも重要です。

本書はがん患者に何らかの皮疹が出現したときの基本的な考え方、重症度別の特徴的な所見と対応の方法から始まって、近年の分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬による皮膚障害に関する最新の知識だけでなく、従来の細胞障害性抗がん薬や鎮痛薬などの支持療法による皮膚障害、つまりいわゆる薬疹も改めて勉強できる構成になっています。その上がんの進行そのものによって皮膚が障害を受ける場合や内臓がんに伴うデルマトロームとしての皮膚症状、さらにウイルス、真菌、細菌による感染症そして粘膜の障害まで豊富な臨床写真を使ってわかりやすく示されており、本書は内容の濃さとボリュームで群を抜いています。がん患者に起こり得る全ての皮膚障害をこれほど網羅した書籍は初めてです。臨床の現場で活用できる非常に実践的な一冊として強くお勧めいたします。